研究ノート

明治の「生意気娘」たち（下）

——「女学生」と小説——

小　関　三　平

XVII.

33年に新世紀を迎えた大日本帝国は、大国・清に勝利してすでに5年、産業化も漸く緒に就き、新興の意気に燃えていた。戦争勃発の年に再び増勢に転じた女学校・女学生の数は、32・38・43年と5〜6年刻みの変曲点を経る毎に、増加率を増し、明治末年に至る18年間に、高等女学校の生徒数は実に30倍増したのだった。[1)]

高等女学校より上級の専門教育を目指す動きは、こうした裾野の拡がりを前提とし、女子英学塾開校の翌34年には、遂に「女子大学」さえ誕生する。梅花女学校の沢山保羅（ボーロ）を助けたり、新潟女学校を設立した基督者・成瀬仁蔵[2)]が上流人士の支援を得て開設した、目白の日本女子大学である。これは世間の注目を浴びたが、やがて、明治末から大正にかけて名を馳せる多くの「生意気」娘を、中退または卒業させることにもなる。

だが、その頃流行した海老茶袴にリボン、手に書物とパラソルの女学生が闊歩するにつれ、またしても、硬・軟の新聞・雑誌は、悪罵や批評の矢を放ち始めた。「伏魔女学校」・「堕落女学生」の「征伐」は、先に触れた22〜3年頃にもなされたものだった。

その具体的な引例は、深谷昌志氏の著書に詳しい。[3)] 幾つかの新聞は32年頃から、大半は捏造記事によって、「妾もあり芸妓女郎上りもあり」とか「通行のと

き、たもとより焼芋を出して食する」とか、些細なことまであげつらい、やがて、知識層相手の有名雑誌までが、中傷の大合唱に加わる。34年に現われた佐藤竹蔵の『女学生』なる書物には、「オールドメイド。女流ハイカラー。鰕茶式部」に向って、「完全なる妻たり母たり得るか」と糾問し、35年の『教育評論』では、毛錐余憤なる筆者が「今日の女学生の生意気加減、お顚婆加減、蓮葉加減」を「イヤ何とも云ひやうがない」と大袈裟に嘆き、歩き方・喋り方まで「只もう癪に障ることばかり」と嫌悪の情を剝き出しにする。更に36年には、高級誌の筈の『日本人』まで、「女学生、何等忌しき名ぞ。海老茶式部、何等淫逸なる声ぞ」と罵倒して、「女子の独立」や「女権の拡張」などの説が「堕落てふ深淵」に溺れさせようとする、などと論じるに至った。

同じ年の10月の毎日新聞は、「女子教育における腐敗文学」なる論説を掲げるが、「堕落」や「腐敗」の一因は、或る種の小説と言うよりはむしろ、「小説」なるもの自体に帰せしめられた。すでに33年には、文部省調査によると、対象とされた19校中の7校で、「新聞、雑誌の小説」が閲覧禁止にされていた。更に驚くことには、9校で私信がすべて「舎監立会の上で開封」されていたのである。文部省が同年に出した「寄宿舎管理注意事項」には、服装・頭髪・外出・音信などに関する詳細な規定があった。10年後には登場する「新しき女」たちを押し出す斥力が、こうした抑圧的なシステムだったのである。

が、保守的な教育家たちを不安にさせる風潮は、たしかにあった。すでに20年代後半の『文学界』誌に代表されるロマンチシズムは、「恋愛」への憧憬と讃美を、観念的にさえ謳い上げていたが、「世紀末」芸術・思想に刺激された新しきロマンチシズムは、「官能」と「性慾」をさえ、いっそう率直に肯定し表現し始めていた。その氷山の一角が、『明星』誌を飾った「裸体画」事件（33年）やフランス帰りの黒田清輝の裸婦像問題（34年）であり、不倫の恋を成就させた与謝野晶子の『みだれ髪』（34年）だった。

XVIII.

現役の女学生の愛と性を写実的に描く一連の小説が大ヒットしたのは、まさにこの30年代半ばである。皮肉なことに、こうした狭義の「女学生小説」を送り出したのは、女学生のスキャンダルを捏造さえしてきた新聞の、連載物だった。

その先駆けとなったのは、34年の『紺暖簾』（読売新聞、6〜9月）だが、作者は意外にも、当時無名の山岸荷葉であり、紅葉の門下である。この作は、もはやまったく忘れられ、文学史に無視されているが、「ストーリーの複雑さ、サスペンスの多い筋の運び」で、新聞小説の歴史にとっては「一つのエポックをつくった」とされる。[4] もっとも、荷葉の意図は、女学生の生活そのものよりは、ヒロインが寄寓していた商家の世界の世話物的な人間模様を、描くにあったろう。好評を得たのもその点で、日本橋の大きな問屋に育った彼は、この世界によく通じていたのである。挿絵作家が、『金色夜叉』で人気を得た梶田半古だったことも、成功の一因とされる。

『紺暖簾』のお扇は、華族女学校とおぼしき学園に通うが、故郷の両親が「商業に失敗」して、老舗が並ぶ日本橋の叔父夫妻の店に寄寓し、叔母のきびしい監督と使用人たちの冷たい態度に耐え、「女教師か何か」で自立することが期待されている。が、彼女自身は「手堅い所へ嫁いで」ゆけるなら、と夢見ていたところへ、隣家の若旦那に恋い焦れる身となり、恋文を書くが偶然で届かず、勇を鼓して彼の義母に頼むが、軽くいなされる。そもそも、旧風の強い老舗街では、若旦那やその店の者もふくめ、女学生自体が「生意気」と見られ、おまけに通学の往き帰りに隣家を覗いたりするお扇は、「けしからん」と反感を持たれるのである。

だが、奔放な学友・高子のたしなめ役たる優等生の諦子（あきこ）が、意外にも同情し、英国帰りの兄と縁結びする。諦子は、自由思想の蓮っ葉娘・高子に「十八世紀的服装」をからかわれては、「日本固有の精神主義」をお説教していたのだが、

お扇の悩みや兄の解説を通して「恋（ラブ）」を理解し始め、持ち前の勝ち気と行動力を、友と兄のために発揮する。お扇の叔母の説得に乗り出したり、縁結びの小道具に、兄の土産の「恋神児（キューピッド）」像を使ったりする。お扇は、叔母への義理も気にし、ヴァイオリンも習いはするが琴が好きなタイプで、「望なく、術なき恋」への未練に涙する、内気で、いささか依存的である。この作の主眼は、隣家の複雑な家庭事情にある。それは日本橋育ちの作者の得意とする世界で、その点が紅葉や露伴の気に入ったのだが、お扇にはそれが壁となるわけである。お扇が片思いを諦めたり、高子の兄の求婚に応ずる心理的過程は、端折られすぎて、いささか唐突だが、荷葉は、古い商家と女学生たちの文化の対立を、描き得てはいる。とりわけ、「お撥（はね）」型の高子は誇張されているが、温室の生真面目娘だった諦子が、恋愛への偏見から自由となり、お扇を励ますばかりか、隣家にまで堂々と乗り込んで行くあたり、新知識にめざめた令嬢ならではの活慥・大胆さであり、また、恋文を書いて隣家の婆やにことづけるお扇もまた、やはり新時代の女学生ではあった。

けれども、彼女は、旧習の中に生きる周囲の壁を乗り越えるほどには、果敢でなかった。彼女は饒倖に恵まれたにすぎない。34年は、まだ20世紀に入って2年目である。『紺暖簾』は、新現象の先端と見えた明治の式部たちが「袴」を着したように、過渡期の産物だった。式部たちは、同時にリボンを髪に、パラソルを手にしたが、お扇も荷葉も、その心は、高子流に言えば「旧世紀」の側に、比重が傾いていた。しかも、明治の青年が「世紀末」思想の洗礼を受けるにさえ、まだ数年を要したのである。「煩悶」と「不安」が語られるには、30年代の後半を待たねばならなかった。透谷が一足先に主張した「自我」の意識が青年層に拡がるのも、だからまた、その頃なのである。

XIX.

教育勅語の発布からすでに10年余が経ち、学校教育では「修身」が学科目の首座にあった。文部省が西村茂樹編の『高等女学校修身』を出版し、「教科書法」

に沿って、これが大きな権威を持った。いわゆる「西村修身」である。

だが、こうした「道学者流」の風靡に対して、痛烈なアンチ・テーゼが、論壇に現われた。それは、4年前には「日本主義」を鼓吹していた花形評論家・高山樗牛の「美的生活を論ず」（『太陽』34年8月）である。ここで彼は、人生の目的は個人の「幸福」であり、「人性本然の要求」たる「本能の満足」にほかならず、それこそが「美的価値の最も醇粋なるもの」なのだ、と主張する。「道徳」と「智識」などは、そうした幸福の実現にとって単に方便・手段にすぎず、「本能は君主にして知徳は臣下」なのである。忠臣義士・孝士烈婦もまた、自然の本能に従うまでで、「理義」を超えており、「偽学」・「腐儒」・「道学先生」の窮知を許さない。

が、35年には、ゾラに心酔する無名の作家が、人間の「獣性」を正面から見据える野心作を、金港堂から刊行した。この『地獄の花』は、23才の永井壮吉（→荷風）の名を知らしめた、若々しい話題作で、「世間」の愚かさを暴き、常識が地獄と見る所にこそ楽園があると、大胆に価値顚倒してみせた。ゾラに傾倒し始めた頃の作である。幽芳が「名医」の仮面を剝ぎ取ったように、ここでは、女子教育者・クリスチャンの文学士・新聞記者が、偽善の代表として選ばれる。

26才の女学校教師・園子は、父が士族出の中級官員だったが、書道教授をする独身の叔母の養女として育ち、東京女学校を出てから外人の経営する英語学校も卒業した。漠たる「功名心」はあっても、職業的自立への格別な意欲はなかったが、虚栄心の強い養母の奔走で、教職に就いたにすぎない。

ところが、知り合いの文学士・笹村にしつこく頼まれて、黒淵家の幼ない一人息子の家庭教師として住み込むことになる。そこは大邸宅だが、或るスキャンダルを新聞に書き立てられて以来、世間との交渉を断たれている。

当家の夫婦は、イギリス人宣教師の通弁と妾だったが、貴族出身のこの宣教師が莫大な遺産を残して死んだ後に、二人が結婚したために、共謀・毒殺の疑いさえ持たれたのである。高等女学校を出た娘・富子は、冷たい世間を蔑み、

却って束縛から自由になれると開き直って、別荘暮しをしながら、男友達を招いたりもする。彼女は大学講師と結婚したものの、夫の身勝手に憤って、離婚したのだった。

園子は、容姿端麗だが男性には心を開かず、法学士や画家との縁談も断ったのだが、白百合を見てはキーツ・シェリィ・ワーズワースを論じたりする才子の笹村に、誘われ、心惹かれ、結婚を夢見る。が、実は、彼は黒渕夫人の愛人だとわかり、しかも、彼女を秘かに恋慕していた独身校長が、酔った勢いで「操」を奪う。そこへ、黒渕夫婦の無理心中が起きる。夫は妻の不行跡を知った上に、新聞社が秘密を嗅ぎつけたので、せめて息子の将来を守ろうとしたのだった。

この事件は、大々的に報じられ、笹村も園子も、黒渕家に係わる者として追い詰められた。だが、この体験は、園子を生れ変らせ、起ち上らせる。富子の言うように、世間が怖れ罵る「汚い地獄」の中でこそ、「安心して自分の信ずる道に進む」ことができる――と悟ったのである。もはや、「貞操と徳行とを看板に世渡り」する不自由から逃れ得た、と作者は記す。

若き荷風は、跋を添えて、宗教と道徳の形成が、本来は動物的たるを免れぬ人類に、「肉体の生理的誘惑」を「全き罪悪」たらしめた、と指摘して、その「暗面」たる「欲情、腕力、暴行等の真実」を「限りなく活写」したい、と宣言する。もちろん、性愛の自然なることを肯ない、夫の衰えに苛立つ中年の妻や、妻を失なった淋しい校長を描く筆は、一種の哀しみを湛えている。

弁解しに来た校長に、「今は結婚いたす事の出来ない」のみか、「もう表立った世の中には出られ無い」と言う園子は、富子と同じく、自ら選んだのではない、狭い閉塞空間でしか、生きられない。

しかし、そうした時代にあって、たとえ逆説と皮肉にすぎぬにせよ、それをこそ「自由自治」だとか、「自分の心に名誉の冠を戴かさる」などと昂然たる女性は、幽芳や春雨の家庭小説のヒロインから、大いに隔たっている。後年の花柳小説に「女性蔑視」を指摘される荷風も、ここでは、世を風靡する「良妻賢

母」教育が抑え込む娘たちの自我に、羽搏きへの可能性を説き、励ますかの如くである。但し、園子の「自立」は、黒淵家の息子を後見する前提で遺産の３分の１を与えられた、幸運あってのことである。

この作は、若さの客気に溢れて、後年の著者を苦笑させたに違いないが、初対面の鷗外にこれを読んだよと言われて嬉しかった、と述懐するように、作者の名を初めて知らしめる出世作ではあった。渡米するのはその１年後である。

XX.

だが、30年代の「女学生小説」を代表するものとなると、翌36年（２月～６月）に読売新聞に連載され、大幅な部数増までもたらした、半ば伝説的な『魔風恋風』である。

硯友社風の荷葉が、世話物仕立てを大団円に終らしたのに対し、荷風より早く「自然主義」の旗を掲げた天外は、新作の主人公・初野を、悲劇のヒロインとして、読者の紅涙を絞らせた。彼女も、皇后が行啓するほどの名門校に通うが、お扇とは異なり、優等生で、しかも自立心と行動力に富む、活潑な娘である。その性格は、有名となった冒頭のシーンに示されている。当時の流行の最先端だった「自転車」に乗り、颯爽と校門を目指して走ってくる。ところが、それが彼女を新たな苦境へと追いやるのだった。

もともと彼女は、お扇よりはるかに不運な家庭環境を背負う、苦学生なのである。両親亡きあと、故郷の家は姉夫婦が継いでいるが、義兄が冷たくあたるので、逃げ出したのだった。そこへ怪我をして入院の身となり、生活費に困り、学業を続けることさえおぼつかなくなる。治療費は誰かが名を隠して払ってくれたのだが、これはこれで気味がわるい。彼女のことを耳にして、下宿の小母さんを介して援助を申し出た、地方出の金持ちで好色な美術学生が現われる。この頃、貧しい女学生を援助して「お妾」にする者も、居たのである。

実は、彼女を恋する帝大生が居た。彼は、初野の親友・芳江の義兄で、その婿と決まっている養子であり、芳江の家は華族である。彼は養家を捨てて初野

と結婚しよう、と思い詰め、温厚で友達思いの芳江は、身を引くつもりになるが、初野は大いに当惑する。わざと怒らせて相手を一旦は遠ざけるが、彼は事実を知ってかえって熱心になる。その間、故郷から妹までが逃げ出してきて、自活すると言うものの、誘惑の多い都会とて、面倒を見てやらねばならない。悩んだ末に、踏み止まって苦学を続けることと、友の兄の愛を受け容れることを、決断する。が、そのとき、彼女を病魔が襲い、死が愛と友情を奪う。自然主義に共鳴する作者は、女学生を主人公とする深刻小説を、初めて描いたのである。

無二の親友の婚約者への愛を、敢えて貫こうと決断した初野には、当時の若者たちにとって最新のテーマだった「自我」の問題が、映し出されているし、大都市の「暗黒面」も、ぬかりなく描かれた。だが、世紀末の諸思潮が滔々と流れ込む思想的な「煩悶」の深刻さは、深く描かれてはいない。誘惑者たちの姿も、三面記事に出てきそうな通俗仕立てである。

ところが、日露開戦後の翌月（38年３月）からこれまた読売新聞に連載され始めた、小栗風葉の『青春』（～39年１月）では、言わば「自我病」と観念的な「官能主義」の陥穽から抜けられぬ、夢想家タイプの哲学青年に、彼に振り廻されて愛の錯覚から生じた妊娠・中絶の悲劇に至る、若い女子学究が配され、今日の新聞小説なら有り得ない生硬な議論が、頻出する。紅葉門下の俊才と謳われた風葉は、戦前からすでに有名作家だったが、自然主義流行に棹さんものと、新たな難題を自らに課したのである。

だが、繁の悲劇となると、いっそう複雑となる。恋人・欣哉と出会うのは、やはり、学友の令嬢・園枝を介してだが、彼女の兄の友人が相手である。この友人たちは一高出身または中退者で、一人は公家でありながら京都帝大の大学院で社会主義を研究している。いきおい、会話には当時最新流行の外国作家や思想家の名が頻出して、論争が含まれており、なにしろ、繁の恋人となるのは、とりわけ観念を好む文科大学の学生で、長大な詩を書いたりしていて、故郷には婚約者がいるが、卒業も就職もする気がない。この男・欣哉は、「人生だの、

理想だの、霊だの、愛だの」となると雄弁で、「抽象的の熟語を手当り次第に振廻し」て、「懐疑」や「煩悶」を熱っぽく語る。今日の常識から見れば、新聞小説とは信じがたいが、これが人気小説だったのだから、新聞の読者の範囲と質が違ったわけである。

繁は、郷里の身内や舎監がすすめる結婚話を煩らわしく思うが、生涯の独身にはひそかに不安もあり、修辞学を研究しているが、「恋愛」と聞けば、顔を赤らめてしまう。最初、欣哉の熱弁の聞き役を務めながら、ときに反論もする話し相手だったが、理想家肌で情熱家の欣哉は、「人間根本の感情の声」こそ大切で、「我」こそ問題なのに、現代は「無趣味、無理想の悪時代」なのだ、と嘆く。バイロンとショーペンハウエル、ハイネとイプセンなどが、彼の中で混在している。やがて学校もやめたいと言い出し、「神経衰弱」で入院したりする。

繁は、そんな彼に同情もし、互いの孤独を慰め合い、「俗悪な形式主義、常識主義と闘う」構えに共感するうちに、愛を誓う仲となる。が、故郷の養家との交渉に欣哉が帰ったまま消息が途絶え、不安になるうちに、舎監がかつて仕えた公家の院生との縁談をすすめ、国元もすっかり乗り気になり、孝心もある繁は動揺し、欣哉と口論になる。そこへ妊娠の兆しが現われ、退学し堕胎するが、すべては破綻し、奈落の底に突き落される。ついに欣哉に「結婚してから死にたい！」と言ったまさにそのとき、警察が彼を捕えに来た。

繁は、一旦は帰郷するが、宇都宮の友人の許に身を寄せ、生活のための辛酸をなめたが、園枝に救われ、その兄夫妻の邸の女執事（ガバネス）になり、欣哉は3年の刑期を終えて出てくる。二人は、しばし共に暮していたわり合うが、恋は醒めており、青春の幻想と錯誤を認め、別れることにした。繁は涙をこぼしたが、「清浄（しょうじょう）な独身主義」に入ると宣言する。母も亡くして家から自由になり、たくましくもなった彼女は、満州にできる清国人の学校に赴任する。

こうして、繁は、精神的な自立をも果たした。欣哉は、自省するとおり「利己的」で、恋愛の本体を性欲としか見れないが、結婚に否定的な彼と出会って、繁にはよかったかもしれない。婿養子でありながら永らく妻を故郷に置いたま

まだった、作者自身のエゴイズムへの自覚も、投影されていよう。風葉の妻は、のち『青鞜』賛助員となった加藤籌子（やす）である。

『ルージン』に倣ったこの作に、二葉亭は「大いに感服」したが、それは、生硬な長ったらしい議論は退屈させるにせよ、当時の或る種の青年たちの姿を「歴然（ありあり）と」映したからだった。[5] 空疎な観念論に熱中した時代は、あったのである。欣哉も繁も、大いに真剣であり、世俗に屈従はしない。勇気ある若者だったし、前半では欣哉の雄弁に振り廻されがちだった繁は、後半では哀れな子をいたわる姉のような態度を示す。彼女は、お扇はもとより初野も知らぬ広い世界を、見たのだった。文芸史家は口を揃えて風葉の「通俗性」を批判するが、[6] 当時のインテリ青年がかぶれていた「思想的煩悶」を、どの「純文学」作家が作品化したろうか？　鷗外の『青年』は、まだ5年も後であり、しかも失敗作だった。岡保生が指摘するように、新世代の男女群像を「時代思潮の中に浮かび上らせ」た『青春』の「史的意義」は、見直されてよい。[7]

XXI.

人生の転機を清国での女子教育に求めるという繁の選択は、新時代ならではのものだった。この作の連載が終ったのは、ロシヤとの戦争が日本の勝利に帰した4ケ月後である。すでに、日本が清国を破った直後から、近隣諸国は、王室あるいは貴族の子女のため、教師の派遣を日本に依頼し始め、やがて、留学生を送り込むようになる。[8]

外国に渡った女教師の先駆は、東京女高師出身の河原操（みさお）子だが、35年に、上海務本（ウーペン）女学堂に初めての「日本女教習」として赴任し、翌36年には内蒙古・カラチンの王室に招かれ、戦中は、潜入した陸軍スパイを秘かに助けた。[9] 他方、戦中の37年には、やはり東京女高師出身の安井てつが、シャム王国に招かれ、3年をそこで過すことになる。[10] 後年、彼女は、新渡戸稲造が国際連盟事務次長に転出したあとを継いで、東京女子大学の第2代校長となった。

韓・清から来日した女子留学生については、まだ全体像がつかまれていない

が、韓からは31年に、清からは遅くても33年には、女子留学生が来ていた。[11] 河原が渡清の直前に教えていたのは、29年に開校の横浜大同学校が33年に設けた女子部だった。長野県立高女で教えていた彼女をそこへ誘ったのは、35年に実践女学校に清国女子部を設けた下田歌子である。

だが、戦争や帝国主義に批判的な、一握りの新しき国際派の世代も生れていた。それを刺戟したのは、ようやく諸国に浸潤し始めた「社会主義」と「無政府主義」であり、日本の場合は基督教徒またはそれからの転向者が、中心的な役割を果たした。その小さな渦の中から生れたミリタントな集団が、「反戦」を掲げて戦争前夜に産声を上げた「平民社」である。

「婦人問題」に早くから関心を持った堺利彦は、その7ケ月前から『家庭雑誌』を発刊していたが、平民社が開戦の1ケ月前に始めた「社会主義婦人講演会」には、女性とそれを包む社会の現実に不満を抱く、少数の女たちが集まって来た。開戦後間もない頃、幸徳秋水は、週刊平民新聞（28号）で、「満天下の婦人諸君」に「真に良妻賢母たらんと欲せば、先づ政治の何物たるを知れ」と勧め、「大に『生意気』ならんことを望む」と呼びかけたが、半年後には、『二十世紀の婦人』を創刊した今井歌子ら3人の女性が弁説を振るって話題となった。平民社の社員となった女たちの中心は、思春期を20年代に過した、女学校卒業者または中退者である。「平民社の女たち」は、戦中の38年1月に、婦人の政治的権利を求めて、治安警察法第5条改正の請願署名運動を行なった。[12]

だが、堺が「平民社の姑」と呼んだのは、大阪事件で勇名を馳せた、あの福田（←景山）英子である。彼女はすでに、子を抱えた40才の未亡人だったが、戦争が終った2ケ月後に、初めて小説『わらはの思ひ出』を書いた。そのヒロイン・山本節子は、或る意味では、『青春』の繁よりもいっそう深く、時代の風に身を晒す。彼女の登場は、繁が窮地に立った頃で、平民社が解散させられたのに代る『新紀元』の創刊直後だった。

お扇や初野と同じく、節子も家庭の事情を背負う下宿生である。父を失ない、母は再婚して、伯父の知己である大蔵官僚の許から、女学校に通っている。が、

医家の伯父が投機に失敗したあと病に倒れ、岡山に帰郷した彼女は、自分の身の上に思い悩む。その間、トルストイを尊敬する同郷の文科大学生・河村俊三と恋し合うが、彼は援助者に縛られるのを嫌って、置手紙を残して米国へ社会学研究に旅立つ。幸い、かつて民権運動に加わり今は「教育新聞」の主筆たる島田夫妻の家に、女書生として住み込むことができるが、節子の境遇は、「実社会と遠隔(とほざか)って居る」高等女学校への疑問を強めさせる。そこで、卒業すると、「造花と裁縫」を学ぶため「職業女学校」に通うことにした。

やがて兄も島田も死に、「天地の間に投出され」て「繊弱(かよわい)女の身」を嘆くが、「一道の光明」に救われる。それはキリスト教だった。だが、人間の堕落と「遍頗な社会」について考えるうちに、高等師範に進んだ友人・青柳を通じて「社会主義」を知り、安部磯雄の『社会問題解釈法』や新聞『平民の声』の読者となり、演説会に行き、「社会主義婦人会」にも入り、「不遇不幸の渦中に徨(さまよ)ふ婦人の力となろう」と決意した。そこで、研究科へ進むかたわら、裁縫・造花・刺繍・編物を主とする「女子職業夜間教授」を始めるが、「経済思想」も必須の科目とし、また、「美的の性情」と「天禀の温和な性質」を養なう音楽・文学・美術も大切だと考える、「多様多式」な教育を志す。

だが、「女ばかしの考へでは抜目がある」と考えているところへ、河村が帰国し、聟取りして医業を継いでほしい伯父夫妻を、仲介者に説き伏せてもらい、河村と結婚する。

この作品は、『青春』よりもさらに観念的な独白から成り、読み物としては退屈だが、当時の女学生出身者の一部にあった、真摯な理想の表白には違いなく、福田英子自身の人生に重なる、或る種のリアリティを持つ。彼女は、二度に亘って女子のための実業学校を設立したし、夫・友作を失なったあと、同居人・石川三四郎と共にキリスト教に馴染んで、海老名弾正の教会に通い、36年に平民社が生れるとそこに出入りし、かたわら、内村鑑三の門を叩いたりしていた。そして、この作の翌年には、田中正造を支援し、次の年（40年）には『世界婦人』を創刊することになる。

女子の実業教育をめざす学校としては、すでに32年に下田歌子が実践女学校と女子工芸学校を創立し、また、高等専門教育のためには、33年に津田梅子が女子英学塾を、吉岡弥生が女子医学校を設立していた。福田の学校はたちまち失敗したが、彼女は啓蒙・宣伝活動を通じての社会運動に没頭し、貧苦と迫害に耐えて子を育て、同志を助け、志を曲げなかったのである。[13)]

XXII.

『わらはの思ひ出』が出た翌年に、英子を訪ねた二葉亭四迷は、その年、永い沈黙を破って、『其面影』を朝日新聞（39年10～12月）に連載した。彼もまた、女学生あがりのクリスチャンを、ヒロインとしたのである。だが、その1年後には英子の訪問を断ったように、両者の資質と立場は当然ながら隔たるところ大きい。

節子が教会で結婚式を挙げて終るのに対して、小夜子は、異母姉の夫との秘密の同棲を断ち切り、聖書伝道に贖罪と自立を求めて去る。愛人たる姉婿の優柔不断も彼女には耐え切れず、節子の頼もしい伴侶とは対照的である。彼女は、役人が小間使いに生ませた娘で、里子に出されたのち、父に引き取られ高等女学校に通ったが、家庭の事情で退学させられてミッション・スクールに転じ、英語が上達して喜んだのも束の間、父の病死後、そこも退学、結婚させられるとたちまち死に別れ、「出戻り」して、義母と異母姉・時子にいじめられながら、じっと耐えていた。

婿養子で姉の夫・哲也は、一高を出た法学士だが生活力に欠ける大学講師で、この家の雰囲気を嫌い、内気で不幸な小夜子に同情し、小夜子もこまやかに哲也の身の回りを世話して、これが時子にヒステリーを起させ、ついには、「姦通」の疑いまでかけられて物差しで頬を打たれ、「犬め！　畜生め！」とまで罵しられる。だが、泣いてばかりの小夜子も、「㊀と思案を定めて面を振上げ」て心を決め、家を去ることにする。牧師の妻として伝道する友人・俊子を頼り、「バイブル・ウーマン」という「棚経読みの尼さんのような」仕事をしよ

うと、考えたのだった。

ところが、途中で出会った哲也に愛を告白され、一夜を共にして、別れの決意が鈍ってしまい、「人間の義理に背く」ことにためらいつつも、笑顔を取り戻し、媚態を示しもする。とうとう、哲也はひそかに貸し間を探して、通い始め、或る日、家を出た。だが、生計の道を思いあぐね、小夜子は、友人・俊子にも批判され、姉への同情にも心裂かれる。哲也と別れるなら面倒を見ると言う俊子に、残酷だと恨みを言うと、「霊の小夜子さんは愛するけど、肉の小夜子さんには残刻(ママ)よ」と宣言されてしまう。

もっとも、不幸な人のため共に働けば「幾分か罪が軽くなるかと」思う小夜子に、一旦は同感を表わした哲也も、妻への憐れみは捨て切れず、「死ぬより外はないじゃありませんか！」と泣き伏す恋人と共に死ぬ気はなく、辛抱と勇気を説いたりする。二人との間に「千里万里の隔り」を感じた小夜子は、ついに、別れの手紙を残して去った。末尾には一行、「御志の少し浅々しう仇めいたるがお怨みにて、こればかりが……」と記される。

彼女は関西の孤児院で働くことになるが、養家に一度は戻った哲也は、清国に渡って、出張の友の前に、物乞い同然の落魄した身を現わし、僅かな金を無心して姿を消す。日露戦争が始まり、病院船に乗る白衣の小夜子を見たという噂に触れて、作者は筆を置く。

哲也が述懐するように、小夜子の方が「外柔内剛で、口当りはちょっと柔いが、心(しん)が確(しっか)りして」おり、「行(や)り出すと極端まで行る」意志の強さを持っている。彼女は、養家への義理を愛ゆえに断ち切った途端に、「何時も孤疑逡巡」して「卒(いざ)となると存外弱い」恋人に、裏切られたのである。

但し、作者は、彼女の葛藤を強めるため、あらかじめ、禁欲的なピューリタニズムをも、伏線として用意した。彼女の「罪」の意識は、『くされたまご』の文子の奔放とは対照的であり、挫折のあと信者らしい生活に入るのは、男に欺され捨てられたあとの、『藪の鶯』の浜子と同じである。文学史では『浮雲』ほどにも評価されぬ『其面影』だが、19年を経て、二葉亭は、時代にふさわしい

衣裳をヒロインにまとわせた。直後に現われる『蒲団』にも『煤煙』にも、一種の風俗として基督教の学校や教会がちらと姿を見せる。基督教は、強まる排斥に抗して青年層に根をおろし、34年には「大挙伝道」を行ない、40年には第7回万国基督教学生青年大会を催すほどだったのである。[14)]

『其面影』の翌年に話題を集めた『蒲団』の横山芳子も、悲しい別れに終る。だが、読者の多くは、モデルたちの姿も生々しいこの「私小説」の描写と、芳子と秀夫を引き裂いた側の語り手の感傷と「官能的」描写に、興味を抱いたにすぎまい。

芳子は、珍らしく家庭に恵まれた女学生ヒロインで、父母は備中の富裕なクリスチャン名士である。ミッション系の神戸女学院の寄宿舎に居た彼女が、父母にねだって上京したのは、文学修業を志して作家・竹中時雄に、押しかけ入門するためで、師の姉の許から英学塾に通っている。が、彼女には神戸教会で知り合った恋人が居た。その田中秀夫は同志社の学生で、二人は、ひそかに京都に遊んだが、これを隠したことを、「新しい女」にふさわしくない、信頼を裏切ったと、師は怒った。

芳子は詫び、「恋の神聖」を誓うが、時雄は惑乱する。しかも、秀夫までが芳子に無断で上京し、二人がしのび逢う気配に、時雄は「疑惑と嫉妬」に駆られ、また、親に対する責任も感じて、別れよと忠告する。彼は、「女子の節操」は「女子の独立を保護」するためだと説く。だが、芳子は、真面目な恋を認めない親たちの「旧風（むかしふう）の頑固（かたくな）」と「無慈悲」を嘆き、恋を貫くために図書館の見習いとして働く、と決心する。

ついに時雄は、父親の出京を求め、秀夫を交えて話し合うが、物別れに終り、そのあと、時雄は「身の潔白」を証明する手紙を見せろ、と迫る。やがて、芳子は、師を欺いた「堕落女学生」だと認めつつも、今後は「清浄な恋」を続けたい、「憐れな女」の身を許してほしい、と訴えたが、時雄は許さない。追い詰められた芳子は、再度の上京を心に誓いつつ、父に連れられて、泣く泣く帰郷せざるを得なかった。時雄はただ、柱の陰から別れの挨拶を送ることしか、で

きなかった。

時雄が思ったように、「こういう事情のもとに、父に伴(つ)れられて帰国する女学生はさぞ多いことで」あったろう。恋人の性急もさることながら、芳子の恋を妨げたのは、師と親の共犯的行為である。

この作や後年の『縁』のモデルが、幾つかの短篇を残した岡田美知代であることは、あまりによく知られている。彼女はやがて再上京し、秀夫のモデル・永代静雄と結婚と離別を繰り返しながら、創作を続けたが、その間、花袋の友に預けた幼な子を失ない、のちには雑誌記者となり、渡米し、別の男性と結婚した。作家として名を成さなかったし、永代との生活は永く続かなかったが、ともかく、激しく命を燃やして、初恋の相手と世帯を構え、生活のために苦闘したのである。

過渡期の「新しい女」は、親・師・恋人への配慮と自我に挟まれ、深い葛藤に身をよじらねばならなかった。帰郷直後に永代に宛てた美知代の書簡には、あえて夢を捨てて草深い山間に身を埋めつつ恋人の幸せを祈る、切々たる心情が綴られている。[15] ひとたびは、古風に身を処したのである。

XXIII.

かつて美妙と稲舟の結婚は、作家と女弟子のそれとして話題となったが、『蒲団』の場合は、師の側が一方的に単なる師弟愛以上のものを感じただけである。ところが、41年には、文学研究会の若い講師が、その弟子たる高級官吏の娘と、動機の一風変った心中未遂事件を惹き起し、新聞が煽情的に報道した。男は、東大出の文学士で花形作家・夏目漱石の門弟・森田草平、女は、日本女子大卒の「禅学令嬢」・平塚明(はる)（→らいてう）である。

その年の秋に漱石が連載した『三四郎』の美弥子は、彼が森田から得た平塚の印象がもとだとされる。だが、明の実像にも翌年に森田が描いた朋子にも、似てはいない。前年の『虞美人草』の藤尾は、「顎で相図をすればすぐ来るものを喜ぶ」ような、支配欲の強い、「我(が)の女」であり、「己の為に愛を解する」の

みの「愛の女王」で、作者はこの「嫌な女」を早死にさせたが、美弥子には、そんな毒はない。彼女は教会に通っており、自分を「迷子（ストレイ・シープ）」と見る目を持ち、結果として三四郎を失恋させたと知ってか、「我が愆（とが）を知る」と呟く。「……なさい」とか「……しましょう」とリードする積極性はあるが、三四郎が受け身だからで、「露悪家」・「イブセン流」といった広田先生や与次郎の評は、誇張か誤解にすぎない。三四郎が振り廻されるのは、妖婦的な媚態を示すわけでもない彼女に、責任はない。前年に出た泉鏡花の『婦系図』の妙子ほど無邪気でないにせよ、いかにも「東京の女学生」らしい、のびやかさ・屈托のなさを、共有していよう。もっとも、妙子はもっと単純・率直で、病床のお蔦を訪ねて、主税が帰ったら「一所に遊んで頂戴よ」などと言い、あまりに天真爛漫で、美弥子の早熟さを持ちはしない。

だが、『三四郎』の連載の前に、同じ朝日新聞には、漱石が推薦した大塚楠緒子（くすおこ）が、教養ある異色の悪女を登場させていた。『空薫（そらだき）』（41年4～5月）である。その続編は、翌年の『そら炊』（5～6月）となった。雛江は、仙台の高等女学校を出てから和漢洋をも専門家に学び、婦人会の書記・『女学雑誌』の記者・家庭教師をするうち、社交界にも「才媛」として名を知られ、貴族院議員の後妻になる。が、夫は24歳も年上、義理の息子・輝一は文科大学生で、3歳しか年が違わない。彼女には「媚（チャーム）」という武器があるが、これまで孤独だった。幼なくて両親に別れ、恋人も夭折したのである。結婚はかえって恋を想い起させ、たちまち不安になるが、輝一が昔の恋人に似ていると見えてくる。彼女は明治婦人会の副会頭にまでなるが、「不倫の恋」の炎に悶え始め、ついに輝一に告白し、「地獄へ落ちても、悲痛の中に満足がある」と言う。輝一は義母の手を振り払う。

彼の恋人・泉子の父の伯爵は好色漢で、雛江はその愛人となり、泉子の母の死の秘密を輝一に告げ、若い二人を引き裂く。その間、伯爵は彼女に「日本風の魂」を女子に培う女学校設立を持ちかけ、学監になってほしい、などと言う。が、そのうち夫が死に、輝一に追い出されてしまう。

帝大教授の妻たる作者にしては大胆だが、これだけ堂々と道ならぬ恋に走る名流夫人は、明治の小説では特異である。恋を告白したとき、雛江は、ダンテが物語るフランチェスカの不倫の恋を描いた文芸雑誌の口絵を手にして、それに事寄せたが、夫の柩を前に懺悔するとき、「フランチェスカを咎める人間は、灰よりも憐れ」だと言ったあと、「頸筋を延ばし」て「艶(あでや)かな、さえざえとした眼」をあげ、薫物の煙りを眺める。いささか通俗仕立ての物語ではあるが、雛江の強烈な個性の前には、藤尾などは霞んでしまう。

塩田良平は、この「毒婦は観念的で、筆が上滑り」としつつも、「温室的な境涯」に在っても「真理から面をそむけまいとした」と、評した。[16] 夫の外遊中に明治女学校の聴講生となった大塚と厳本の親密さは、『安曇野』や『森』に描かれたほどだが、優雅な名流夫人が激しい情念を秘めるとて、なんら驚くには値しまい。

だが、『煤煙』（42年）の朋子は、雛江より更に複雑な魔(デーモン)を抱えた、知的な令嬢である。朋子は、東京の裕福な家庭の娘で、「お茶の水の女学校」で試験管相手の3年を過したあと、「目白の女子大学」を卒業し、或る文学研究会で講師の要吉に接近した。創作の批評を乞い、ダヌンツィオの『死の勝利』を借りる――という間柄から始まったが、要吉に妻子があっても、朋子は頻繁に手紙を送り、悩みを打ち明ける。禅寺にも通うこの哲学少女の煩悶は、「内なる我」に潜む何物かへの嫌悪にある。

朋子には、ひたむきさと激しい官能が共存し、興奮すると、「手当り任せに男の体を摑んで引寄せる」ほどだが、別の瞬間には、「魔王(サタン)のように近寄り難い」とも思わせる。「ダブル・パアソナリティ」をそこに要吉は感じ、「汚い肉欲」が「天上の炎」の「浄い情火」の下に隠れているとも、彼女が「煤煙」が好きなのも、形は「猛烈で、強い力がこもって」いるが「あくまで静謐」だから、とも思う。それは「不思儀な女」であり、「噴火山」のように「近寄ると硫黄臭い烟の中へ捲き込まれさう」になる。

彼女は、『青春』の繁よりもはるかに思弁的で、また行動的で、人の批評など

眼中にない。朋子の望みは、愛されることではなく、自分を理解させ、相手を支配することである。愛は彼女にとって「敗北」なのだ。ところが、要吉に「負け」そうになった。「自分を非我の地位に置いて観察する習慣」が崩れたのが、許せない。「女は自分を滅ぼした男を滅ぼさずには置かない」と、彼女は日記に書き、「我が cause に因って斃れ」ることを望んで、ついに、要吉に心中しようと迫った。

「自意識を失わぬ狂人」になろうと、要吉は同意して、朋子は家から短刀を持ち出し、塩原温泉へと死の旅路を急ぐ。が、近松の思いもつかぬ心中の動機である。要吉は、「私のために死ぬ」と言ってくれ、と頼むが、朋子は、自己の意志に従って相手に殺させ、彼にも死なせたいのだ。が、雪山で最後の瞬間に、要吉は、人為による死を捨て、二人は「氷獄」の下での凍死を願う。けれども、自然は彼らに「死の勝利」を許さなかったのである。

この前代未聞の奇怪な心中は、動機が観念的にすぎて、藤村操の自殺よりも判り難い。ダヌンツィオやイプセンを愛読し、また、師の推挽を裏切らぬ新味を、と狙った森田の仮構があり、モデルたる平塚は、この事件の小説化に同意し期待さえしたが、朋子像にはショックを受けたと言う。[17]

誤報を含めて、激しい非難と侮辱を受けたあとも、平塚は幾度か森田に会い、二人の友情はしばらく続き、平塚の渡米先で落ち合う相談もできていた。彼らを妨げたのは、彼女の「思わせぶり」と「遊び」を嫌い、森田の創作への専念を望んだ漱石だった。

彼女は、森田に対しては誘惑していると思わなかったほど、性的に未成熟だった。観念で頭の中は一杯だったのだろう。女学生時代、小説にもあまり興味がなかった。

けれども、東京高女から日本女子大・家政科を卒業後、女子英学塾に少し通ったり、森田や生田長江・与謝野晶子らと出会うことになるユニヴァーサリスト教会付属・成美女子英語学校に通い、そこの教会で開かれる「閨秀文学会」に加わるかたわら、植村正久の富士見教会や海老名弾正の本郷教会にも行き、

内村鑑三の本を読んだり、綱島梁川の「見神」論を読んだりもし、そののちには、円覚寺・今北洪川の『禅海一瀾』に惹かれ、臨済宗・両忘庵の釈宗活の許で「見性（しょう）悟入」をめざしたことは、注目されていい。事件後は、日本禅学堂にも通った。この東洋哲学への関心は、明治末期に青春を過した女学生としては、或る特異な例に属しよう。

XXIV.

『煤煙』と並んで、明治の末に生意気娘のもう一つの極致を描いたのは、やはり実在のモデルをヒロインとした、44年の『或る女のグリンプス』（『白樺』44年3月～大正2年3月）である。「基督教婦人同盟」の幹部で社交家でもある名流婦人の娘・田鶴子は、「一時女学生界の流行を風靡」し、また多くの男たちに恋され、「其間を手際よく操り」ながら、「自分の若い心を楽しませて行く程のタクトを有し」ていたが、実は、心に深い傷を負っていた。「祈祷と節欲と殺情を強い」る女学校の寄宿舎で、編物に熱中していると、教師はそれを男のためと断定し、舎監は彼女を監禁した。「おぼろげながら神と云うものを恋しかけ」ていた少女は、それ以後一変して、15才の時には、恋人を翻弄して自殺させてしまい、それからは、「血の味をしめた虎の子の様な渇欲」に駆られ始めた。

音楽学校にも進むが、ケーベル博士に批評されると、ヴァイオリンを窓から投げ出して、そのまま退校した。やがて、母が可愛がる新進作家と強引に結婚するが、熱烈な基督教徒の彼が自分と同じ平凡な欲望と嫉妬心の虜であることに失望し、恋は一週間で冷めてしまう。4ケ月後には逃げ出すが、生んだ子は母にいじめられた。

これは、言うまでなく、28～9年に話題となった佐々城信子がモデルだが、有島は、その後の34年に新聞が書き立てた、信子の二度目の醜聞を、事件後10年経って、素材としたのである。それは、両親を失ない、弟妹たちを残された彼女が、冷たい親族や後見人たる母の親友などに追われるようにして、意に染まぬ婚約者の待つ米国へと船出して、その船中で妻子ある事務長と愛し合い、帰

国して同棲を始めた――という事件だった。これを新聞社に洩らしたのは、同船した鳩山春子とされるが、前夫の独歩は、『鎌倉夫人』（35年）と死後出版された『欺かざるの記』（41年）で、信子を悪しざまに罵った。

実は、在米の婚約者とは有島の友人であり、両者ともに佐々城家の知己だったし、有島自身、信子の出発時に世話する古藤として作中に登場する。ところが、信子たちの帰国と同棲の始まりでこの作を終った有島が、その後、エリスの性心理学などを下敷きとし、また徐々に深まった彼自身の本能説と厭世観を重ねて、言わば後篇にあたる部分を加え、8年後（大正8年）に、田鶴子を葉子に変えて破滅させる『或る女』を書いた。

信子の生涯を詳査した阿部光子が伝える実像と、作中の葉子は、あまりに隔たっており、晩年の信子は、敬虔な基督者として周囲の信望を集めたという。[18] この作に、怒った妹・義江は有島に抗議し、面会の約束を得たが、それを果たす前に、有島は波多野秋子と心中してしまった。

大里恭三郎は、葉子の孤立を「並外れた驕慢な性格が招いた」とするが、[19] 作者自身は、「一人の勝気な鋭敏な急進的な女性」を描いたと言い、「自我に目ざめかけて而かも自分にも方向が解らず社会はその人を如向にあつかふべきかを知らない時代」に、その背景を見たのである。

さて、有島の作が『白樺』に連載され始めた頃、大阪朝日新聞には無名の若い女流の新作『あきらめ』（44年1～3月）が連載された。これは、前年に募られた懸賞小説の1位入選作で、作者は、日本女子大学に1期入学しながら間もなく中退し、同じ露伴門下の兄弟子の妻となっている、田村（←佐藤）俊子（25才）だった。

その背景には、珍らしく、新派らしき芝居の世界と花柳界があしらわれ、しかもその描写はリアリティ充分で、その上に、女優となった女学校の先輩や後輩との同性愛が、官能的な筆致で描かれている。はなはだ異色の作品だった。有島の作とは異なって、物語そのものはまったくの仮構だが、描写の写実性は、作者の体験に裏打ちされてのものだった。というのも、彼女は女子大時代に外

人女性教師を深く思慕したこともあり、浅草生れで、4年前からすでに女優として芸名を持つ身だったのである。帝劇女優養成所に応募して話題となった森律子より2年早く、松井須磨子のデビューは、この作の連載が終った半年後のことだった。

『あきらめ』の冒頭は、女子大学の美しい校庭の描写である。だが、荻生野富枝は、新聞に名が出たばかりに学監の注意を受けたばかりだった。新聞懸賞に応募した作が、入選して派手に書き立てられたからである。彼女は文士の妻となった姉・都満子の家に居候して、妹・貴枝は料理屋の養女になっており、故郷の岐阜には祖母と継母が居る。旧家だが、父はすでに亡く、実母も富枝が生れてすぐ世を去った。だが、姉の家も、居心地はよくない。37～38才の義兄がまだ15才の貴枝を妙に可愛いがり、姉が嫉妬して騒ぎ立てるからだ。

義兄が文士である上に、芝居の脚本が入選して上演までされるようになり、演劇界の裏面も見えてくる。富豪の息子で劇作家の千早梓は、学士の肩書と金銭の力で有力者となっていて、新派の革新座の座長に、或る新人女優を薦めるが、それは、富枝が憧れていた元上級生・三輪初女である。彼女は確かに美しい才媛で、久し振りに会ったとき、千早たちの傍で『人形の家』を読んでいたが、富枝の入選作の『塵埃』を賞めたものの、なんだか素っ気ない。やがて、千早の許に出入りする半田の勤める朝夕新聞が、三輪のことを派手に書き立て、千早の父の愛妾などと吹聴したので、三輪は女優業から一時身を引き、演劇研究に洋行することになるが、費用は千早が出したらしい。

富枝の作は、革新座のライヴァルである大和座の手で上演された。座付作者は義兄と知り合いで、演出上の注意について義兄の助言を求めては、とすすめるが、自立心の強い富枝は断り、役者たちに任せることにした。批評は賛否両論あったが、まずは成功で富枝も満足し、姉や妹の養家でもそれを誇らしく思ってくれた。妹が養女となった料理屋「東（あづま）」のお内儀は、捌けた人物で、そこに出入りする芸者の千萬次ともども、富枝には好意を持ち、富枝の方でも、粋筋の女たちに、ひそかな好奇心と親しみを抱いている。あどけなさを残しな

がらも義兄には大胆な媚態を示す妹に、富枝は内心の嘆きを隠せないが、その貴枝も、いつとはなく大人びてきている。

女子大学は退学することにして、うっとうしい姉の家も出たいと思うが、自活する道はない。上京して一緒に自作の上演を観た、無知な継母には、「職業を始めた」などと言ってみたものの、稿料が入る道とてない。唯一人、彼女を真剣に思慕してくれる、下級生、文部次官の娘・角田染子だけは、彼女の心の慰めである。が、染子には洋行中の婚約者が居り、しかも肺を病んで自由な外出も許されない。

だが、富枝が絶えず気にしているのは、彼女が面倒を見る約束の祖母のことである。彼女の「現在の境遇に於ける欲望や自由は皆あきらめの陰に隠れて」いて、「云い度いやうな不足」や「切迫した」事情があるわけではない。「唯祖母への愛情だけ」が自分を岐阜に行かせるのだ、と自ら納得させて、彼女は継母と共に東京を離れることに決める。

XXV.

国運を賭した大国との戦いに２度も続けて勝った、若き大日本帝国は、世界の脚光を浴びた。戦勝の陰には、「愛国」の熱情に駆られた銃後の女性たちも、大いに与って力があった。

だが、女たちは、男たちよりもはるかに多くを、「あきらめ」ねばならなかった。「良妻賢母」教育は、なによりまず、国家のため・家族のために、すべてに耐え忍ぶことを、娘たちに教えたのである。

けれども、目に触れる戦後の現実や欧米から流れ込む新思想は、一部の娘たちの眼を見開かさずにはおかなかった。彼女たちは、「女学校」という名の閉鎖空間の外へと、飛び出さずにはおれない。田村の入賞作の連載（大阪朝日新聞）が終った半年後（44年９月）には、『人形の家』が初演され、人妻たるノラの家出に観客は衝撃を受けたが、同じ月には、学校を卒業したばかりの若い娘たちが、女子の「天賦の才能」を発揮し「自己を解放」すべく、文芸結社・青鞜社

を作り、会費制・月刊の機関紙を発行し始めた。その企画を示唆し、Blue Stocking の名を教えたのは、閨秀文学会の指導者・生田長江だったが、計画を実現し運営したのは、結束した「生意気」娘たちだった。Blue Stocking とは、本来は、モンタギュ夫人のサロンで芸術・学問を語らった才女たちに、揶揄と共に投げつけられた蔑称だったが、そうと知りつつ敢えて、「青鞜」の名に置き換えたところにも、盛んな意気が示されている。

発起人5人中4人までは、日本女子大学に学んだ「海老茶式部」たちだった。成瀬仁蔵はどんな感慨を抱いたのだろうか。しかも、旗頭は、あの大スキャンダルのヒロイン・平塚明だった。彼女にこの試みを示唆した長江の親友は、共に閨秀文学会を指導した森田草平であり、草平はまた、田村の応募作に高得点を与えた審査員だった。一躍して花形作家となったばかりの田村は、日本女子大の後輩たちの始めた青鞜社の社員として名を連ね、創刊号に短篇『生血』を寄せた。

平塚と田村は、互いに肌合いを異にし、深い友情には結ばれなかったが、奔放さにおいては似ていた。田村は、5年後に「ノラ」よろしく夫を捨て、愛人を追ってカナダへ渡り、18年の後に帰国したが、2年後には中国へ行き、そこで死んだ。波瀾に富んだ人生だった。彼女の個性は、瀬戸内晴美の手で鮮やかに描かれている。[20]

『青鞜社』は、『平民社』に集まった女たちに較べれば、社会と「政治」よりも、文学と「性」に関心を傾けた。[21] 後者が、愛する男たちに啓発され彼らを陰で支えたのに対して、前者は、同性の連帯に基き、女性の内面的な自覚を重んじ、「解放」と「自立」を主張した。立場は異なるが、この二つの女性グループこそは、明治の女学校が産み落した、「生意気」娘の精華であった。

「開化」を象徴した女学校は、帝国の完成期に至って、「自我」にめざめた娘たちを産み、愕然とし、体面の維持に躍起となる。40年に米国の美人コンクールに推薦された広島市長の娘は、学習院退学を乃木校長に通告され、41年に日劇に応募した元代議士の娘・森律子は、跡見学園の卒業名簿から、心中未遂の

平塚明は日本女子大のそれから、抹消された。明治が終った翌年、『青鞜社』講演会に女子英学塾の生徒が参加したと知った或る教師は、顔面蒼白となって震えながら、「おお神様、哀れな彼女を悪魔の誘ないから救わせ給え」と祈りを捧げた。[22] その講演会に参加した青山（→山川）菊栄は、45年に卒業したばかりだったが、在学中だった神近市子は、大正4年の卒業直前に津田梅子に戒められ、弘前に赴任したが、3ケ月で呼び戻された。青鞜社員と判ったからである。[23] 幕末生れで明治女学校や華族女学校の初期から教壇に立った津田と、海老茶式部＝新しき女たちの間の世代に属して、田沢稲舟や大塚楠緒子より少し年下・佐々城信子と同年の与謝野晶子は、『青鞜』創刊号には一文を寄せたが、心中未遂後に若い禅僧に求めて処女を捨てた、らいてうの告白を伝え聞くと、「立派な家庭の教育ある娘にそんなだらしない行いは無い筈」とし、「そんな女として考えたくない」と記した。[24]

女子教育をめぐる新・旧の思想対立が表面化した20年前後から、更に4半世紀が流れていた。「女学」＝「女権」と考えた厳本善治流は、とっくに色褪せ、「婦徳」と「高学歴」を双つながら売り物とする女学校は、娘たちを花嫁市場に送り出すためのブランドと化し始める。

〔付記〕 些か「尻切れトンボ」の感は拭えないが、このあたりで、筆を擱くことにしたい。所員でもない筆者に多くの紙数を与えて下さった本誌編集委員会に、深謝申し上げる。

なお、この稿に取りかかってから、似たテーマを扱った下記の労作がすでにあるとわかり、参照させていただいた。

(1) 福田清人「女学生」（『国文学・解釈と鑑賞』昭和29年3月）
(2) 杉本邦子「女学生」（　　〃　　〃 43年4月）
(3) 本田和子『女学生の系譜』（青土社、平成2年）

小稿の文脈からして、これらに触れる必要が生じなかったが、著者たちに対する敬意は、別の機会に論評の形で表したい。

註

1）桑原三二、前掲書
2）成瀬仁蔵をはじめ、明治女子教育の指導者については、平塚益徳、唐沢富太郎の前掲書に詳しい。独立した評伝は省略。
3）深谷昌志、前掲書
4）高木健夫、前掲書
5）二葉亭四迷「未亡人と人道問題」（『女学世界』明治39年10月）
6）伊藤整や中村光夫の前掲書が典型的である。
7）岡保生『評伝　小栗風葉』（桜楓社、昭和46年）
8）清・韓の留学生については、数少ない貴重な研究として、さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』（くろしお出版、昭和56年）、厳安生『日本留学精神史』（岩波書店、平成３年）、任展慧『日本における朝鮮人文学の歴史』（法政大学出版局、平成６年）
9）福島貞子『日露戦争秘史中の河原操子』（婦女新聞社、昭和10年）、河原操子『カラチン王妃と私』（芙蓉書房、昭和44年）
10）青山なを『安井てつ伝』（前掲）
11）さねとう、任展慧の前掲書
12）西川文子『平民社の女』（青山館、昭和59年）、鈴木裕子編『資料　平民社の女たち』（不二出版、昭和61年）
13）村田静子、前掲書
14）比屋根安定、松宮一也の前掲書
15）山内祥史「花袋『蒲団』の背景と神戸女学院」（『神戸女学院百年史各論』、同編集委員会、昭和56年）、永代美知代「花袋の『蒲団』と私」（『婦人朝日』昭和33年７月）
16）塩田良平、前掲書
17）平塚らいてう『わたくしの歩いた道』（新評論社、昭和30年）、瀬戸内晴美『青鞜』（中央公論社、昭和59年）
18）阿部光子『「或る女」の生涯』（新潮社、昭和57年）
19）大里恭三郎『「或る女」の世界』（審美社、昭和62年）
20）瀬戸内晴美『田村俊子』（文藝春秋社、昭和36年→講談社文芸文庫、平成５年）
21）瀬戸内晴美『青鞜』（前掲）、井手文子『「青鞜」の女たち』（海燕書房、昭和50年）
22）山川菊栄、前掲書
23）神近市子『私の半生記』（近代生活社、昭和31年）
24）『中央公論』大正２年７月、臨時増刊婦人問題号

Summary

The Insolent Daughters in the Meiji Era (Ⅲ) : The Girl Student and the Novel

Sampei Koseki

After the Sino-Japan War, the number of girls' school increased rapidly under the strengthened governmental intervention and control with "Ryosai-Kenbo" (Good wife-Wise mother) as their official slogan. The girl student became a new social phenomenon, where the journalism found a victim of scandal-mongering. On the other hand, some novelists were interested in describing various types of girl students and female teachers as new heroines. These heroines suffered from the conflicts between the inner aspirations and the social environment. "The naturalism," which was fashionable in those days, influenced such novelists though it was interpreted arbitrarily.

Together with the naturalism, other European thoughts, including the anarchism, the socialism and the feminism were introduced and welcomed by a few young radicals. There appeared two aggressive groups among them. One was the "Heimin-sha" (Levelers), an anarchist group, some of whose members were female. The other was the "Seitou-sha" (Blue Stocking), a feminist group which was founded by several alumnae of *Nippon Joshidaigaku*, the only women's university then. Paradoxically, the girls' school bred the most militant protestants.